

# (研究ノート) D. MacCannell 著 “The Ethics of Sightseeing” の批判的継承に向けて

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

## 【目次】

1. はじめに
2. マキヤーネルによる「観光の倫理」の方向性
3. 根本諸概念に関するマキヤーネルの理解
4. 「真正性」と「眼差し」の議論
5. 結論に代えて

## 1. はじめに

観光学の古典『ザ・ツーリスト』の著者マキヤーネルは2011年に“The Ethics of Sightseeing”を上梓した。本書はツーリストによる倫理的行動の諸コードを提案する類の「観光の倫理」に関する書物とは一線を画している。即ち本書は、マキヤーネル曰く「創造的にツーリストであることに関する議論、ツーリストが社会的象徴作用にいかに関係するかに関する議論、観光客の主観性に関する議論が盛り上がることを期待」しつつ、アリストテレスの「徳倫理」や精神分析理論（特にラカン）、ゴッフマンやフーコーの社会理論を縦横に駆使しつつ彼独自の「観光の倫理」の議論を練り上げたものであって、今後「観光の倫理」を語る上での必読書となる点は疑いえない。本稿では、本書にてマキヤーネルが提示する様々な認識や論点を筆者なりの観点から整理し、疑問点や更に突き詰めて探究すべき課題を抽出することを目指す。

予備的にマキヤーネルの基本姿勢について一言述べておけば、まず彼にとって観光とは、社会の周辺に位置するトリビアルな現象ではない。彼によれば観光はモースの言う「全体的社会事実」であり、「ツーリスト活動全体は一般的な社会的・人間的領域に関する洞察を与えるポテンシャルを持

つ」ものとされ、人間の全体（身体、精神、存在、実存）を巻き込むものである(ES,p42-43)。端的に言えば、観光を考えることは人間社会全体や人間そのものを考えること、に他ならない。然るに、マキヤーネルによれば数多存在する経済的観点からの観光研究に従えば、ツーリストは詰まるところ「自由時間と可処分所得」のみを特徴とする存在へと切り詰められてしまい、「ツーリストの経験」や「ツーリストの主観性」について問われることは甚だ少ない。この状況に鑑みマキヤーネルは、「観光の倫理」の議論を展開することで、「ツーリストや研究者がより強度を持ち、創造的で、倫理的な関与の仕方を観光に対して持つこと」という、彼の「唯一の願い」の実現を図ろうとするのである(ES,p4,p11)。

## 2. マキヤーネルによる「観光の倫理」の方向性

マキヤーネルの「観光の倫理」の議論の特徴として、従来の「道徳的規準や行動コードの確定」を問題意識として持つ「観光の倫理」の議論の重要性を理解しつつも、アリストテレスに端を発する徳倫理をその主要な源泉とすることで、ツーリスト本人の実存や、ツーリストが持つ快楽や欲望、ひいては「善」という概念に焦点が当てられ、様々な行為者間での具体的行為に関して語られる「倫理」についてよりも、ツーリスト本人の実存的在り方に関わるものとして「倫理」の議論が展開されている点が挙げられると筆者には見受けられる。「倫理」が「自己と他者との関係」の中にその棲息地を持つ議論領域であるとして、マキヤーネルの議論はどちらかと言えば「自己」の方に注目す

るものだとも言える。(この点は、「ツーリズムの他者」として「文化的他者、他の生、他の強烈な快楽、他の愛」を挙げ、特に「(欲望の失われた対象を含む) 無意識」を「究極の他者」とすることに顕著なように、マキヤーネルが精神分析理論を撰取した上で、他者概念を個別具体的人間に留まらない形に拡張して議論展開している点に由来しているとも言えよう〔ES,p11〕)。

角度を変えて言えば、マキヤーネルの議論は蓄積されつつある「観光の倫理」の議論に、「ツーリストという主体の在り方」、「徳や善」「快楽や欲望」といった概念に焦点を合わせる議論を付け加えようとするものである。彼は先行議論を御破算にすることや完全にそれらとは異質な場所に屹立する議論を提出しているわけではない。マキヤーネルは「ツーリズムに関する、誰も逃れられない倫理的な問い」を列挙しているが<sup>ii</sup>、これは Lovelock&Lovelock(2013)による「倫理は人間であることの基本的側面である故に、ツーリズム産業は倫理を回避することはできない」という認識と共鳴するものであるし<sup>iii</sup>、「ツーリストの倫理は、行動ルールの究極目的と地位を問う必要がある」(ES,p49)とのマキヤーネルの言葉もまた、UNWTO が提出する GCET(Global Code of Ethics for Tourism)の 10 個の原理の基礎(「超・規範」)の必要性を言う Lovelock&Lovelock(2013)と同じ問題意識を持つことを示すものであろう(ET,345)但しマキヤーネルは「観光の倫理の鍵は、アリストテレスに従い、行動のルールを見ることではなく、ツーリストの快楽(罪と無垢)を見ることにある」(ES,p49)との立場を表明し、道徳的規範の設定や遵守・違反を巡る問題には積極的にコミットせず、「徳・善・快楽・欲望」といった概念に視線を向けるのである。Lovelock&Lovelock(2013)の整理によれば、「観光の倫理」に関する議論は「功利主義、権利、配分の正義、ケアの倫理、徳」という 5 つの倫理理論の枠組みに依拠するとされるが(ET,p354)、マキ

ヤーネルの理論はこのうち「徳」に依拠するものだと位置づけられることともなるだろう。

マキヤーネルの議論の位置を大よそ以上のようなものと捉えたとして、では、彼の「観光の倫理」の議論の根本的な方向性はどのようなものと理解すべきであろうか。これについて、筆者なりに端的にまとめるとすれば、「ツーリストの円環」の中に安住することが批判され、「ツーリストが欲望の完全な生産的ポテンシャルに達すること」が肯定される、と言えそうである。

「ツーリストの円環」についてマキヤーネルはまとまった形で定義をしているわけではないが、断片的記述や事例を繋ぎ合わせつつまとめるならば、それは精神分析における「エゴの構造」を模倣する形で資本により形成される、「商業化されたツーリスト経験」、「構築されマーケティングされるツーリスト目的地」、「消費者の繭のリゾーム」、「ショッピングモールの網の目」等を指す概念であって、最も有名な事例として「ディズニーランド」が挙げられている(ES,p98,p101-102)。マキヤーネルによれば、ツーリストはそこにおいて「構築された幻想」というスクリーンに魅せられたままになってしまう(ES,p10)、或いは「準備されたアレンジメントの単なる比喩」となってしま(ES,p6)。筆者なりに大よその内実を言い換えれば、ツーリスト向けに誰かの手によって作られた欲望の装置の中で期待された通りの役割を果たすだけの存在になってしまう時、人は「ツーリストの円環」にはまり込んでいると言われる、とでも表現できるのではないだろうか。

これに対し肯定される「ツーリストが欲望の完全な生産的ポテンシャルに達すること」とはどのようなことか。これについてもマキヤーネルが整然とした形で議論を展開しているわけではないので、断片的記述からの理解の形成となるが、マキヤーネルは「観光により人生が全く変わってしまう事例」を挙げている。その中には、ナチスによりレジスタンスがそこで殺された場所を示す石版

をパリで見た旅行者が熱心なアンチ・ファシストになった事例や、熱帯雨林を訪れ全ての生命が傷つきやすく相互に関係していることを強く一人の学生が理解する事例などが挙げられており、マキヤーネルによれば「これらの変容は完全に倫理的領域で生じる」とされる(ES,p45)。或いは「都市の変容させる力」にアクセスしたツーリストについては以下のように表現される。「ツーリストは元々の自己へは回帰しない。実存の土台が変化する。音楽やダンスを別様に聞く、別様に食べる、別様に座る、別様に着飾る、別様に愛する、別様に思考し感じる。」(ES,p112)

「ツーリストの円環」にはまり込んだままの状態との対比ということ言えば、マキヤーネルが肯定的に評価するのは「アトラクションとツーリストとの出会いから、新たなアイデア、解決、夢が生まれること」(ES,p45)である。その為に、ツーリストの倫理的仕事は「自分自身の個人的快楽と、<楽しめ！>という社会的命令との間の差異を見つけようと努力すること」(ES,p53)だと表現される。

以上のマキヤーネルの議論を受け、本稿では扱う余裕が無いが、「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャルの実現」というテーマについて批判的に今後検討すべきは、「場所」・「原因や理由」・「程度」の3つの観点からの問いではないかと考えられる。「場所」については、例えば代表的な「ツーリストの円環」と言われるディズニーランドやショッピングモールにおいても、アトラクションとツーリストとの出会いから「新たなアイデア、解決、夢」は生まれうるのではないかと、という問題がある。 「原因や理由」については、いかにして「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャルの実現」が生じるのか、それはツーリストの「努力」によるものなのか、「アトラクションの持つ力」によるのか、それが生じる条件には何があるか、といった問題が立てられるはずである。また「程度」については、「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャル

の実現」に関して程度を区分することはできるのか、その区分に応じて倫理的評価も変わってくるのか、といった問いが浮上しておかしくはない。

マキヤーネルの「観光の倫理」の大きな方向性については、以上のような根本的な問いが立てられうるが、謂わばこの「本丸」に斬り込む作業は別の機会に譲り、本稿では以下、マキヤーネルの概念理解や問題設定を幾つかのテーマに分け整理検討し、疑問点を洗い出すとともに、作業課題を見通す作業を進めていきたい。この細かい作業の上で、マキヤーネルの大きな議論の方向性を補足・批判・更新していくことも、次のステップとして可能となるだろう。

### 3. 根本諸概念に関するマキヤーネルの理解

#### 3. 1 「善」

「善」という概念は、高度に抽象的で取扱いが難しい。マキヤーネル自身、議論の端々で「善」について魅力的に言葉を重ねているが、なお細部を詰める必要があるように筆者には思われる。

基本的にマキヤーネルの倫理的諸概念（善・欲望・快楽等）に関する理解はアリストテレスと精神分析に依拠しているわけだが<sup>iv</sup>、マキヤーネルの理解によれば、観光研究の第2ウェーブとして「楽しみ」に焦点を合わせる研究が90年代以降出てきたものの、「そもそも快楽とは何か」という問いや、「ツーリズムにおける善とは何か？それはツーリストの快楽とどう関係するか？」という根源的な問いが十分に突き詰められてきていない(ES,p36)。この状況に鑑み、「ツーリストの快楽と欲望の善さ」が問われねばならないし(ES,p62)、「ツーリストの欲望、及びその欲望に基づいてツーリストが行動する仕方から、いかなる善が生まれるのか」という倫理的問題が立てられねばならない(ES,p48)、とマキヤーネルは言う。

加えて、「善」に関する問いを問うことが、「ツーリストの円環」への批判や脱出の条件と理解さ

れている点にも注目しておかねばならない。アトラクションを前にして、倫理的問い（「この場所は幸福や善、徳、自由を具現しているのか否か」）が問われない場合、「虚構的・幻想的形式がツーリストを虜にし、ツーリストとアトラクションとの間のスクリーンとなる」、或いは「幻想が支配し無限に反復される」とマキャーネルは言う(ES,p60)。

以上のマキャーネルによる「善に関する問い」の意義については、こう考えれば良いだろう。即ち、「観光に対するより倫理的・創造的な関わり方」をツーリストや研究者が持つことを望むマキャーネルにとって、「ツーリストの欲望」や「ツーリストの行動の結果」の「善さ」に関する問いを立てることは、ツーリストの為に予め「ツーリストの円環」の中で準備された快楽を享受することで満足しない為に必要な行為だと考えられている、ということである。自らの欲望に対し自覚的・反省的になること、「快楽」と「善」とは異なるものと理解し、「善」への問いを提起すること、これがツーリストとして「倫理的・創造的」である為にマキャーネルによって要求されていると言える。

「ツーリストの経験や主観性」に焦点を合わせるマキャーネルにとって、まずもって上記のような形で「善への問い」の必要性を喚起することが重要なのは十分に理解できる。その上で、更に今後「善への問い」を大切に育て洗練させていく為に、以下の問いを浮上させておきたい。

1) そもそも誰が「善への問い」を立てるのか（誰が立てるべきなのか、いかにして「善への問いを立てる」ようになるのか）。2) 「善」の帰属先や「善」同士の対立の問題はどうするのか（誰にとっての「善」なのか、「善」同士が対立した場合、いかに調停するのか）。3) 「善」の判定者・判定基準の問題はどうするのか（ある事柄が「善」であるといかにして、誰が判定するのか）。4) マキャーネルが求める「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャルの実現」や「ツーリストの実存的土台の変化」という事柄と「善」との関わりはどのようなもの

か（両者は必ずしも一致しないのではないか、両者が相反する場合はどうするのか）。

これらの問いについては、マキャーネル以外の「観光の倫理」に関するこれまでの議論蓄積や具体的な観光現象を巡る事例を通して、マキャーネルの歩みを継承し、問いを詰めていく必要があるだろう。

### 3. 2 「欲望」「快楽」「幻想」「想像力」

「欲望」「快楽」「幻想」「想像力」というテーマについてマキャーネルは大きく精神分析理論に依拠しているが、彼のこの「精神分析理論の観光研究への応用」の妥当性や正当性については、フロイトやラカンの言説へと遡行し検討していく必要があるだろう。但し本稿では少なくともマキャーネルの立論の中でのそれらの概念の内実と位置を整理し、疑問点・継承すべき課題を浮上させるに留めたい。

まず「欲望」と「快楽」についてだが、これらについても精神分析に依拠した理解や論点が本書全体の各所に散りばめられており、それらを一つ一つ解きほぐしていくのも興味深い作業ではある。ここでは「ツーリストの円環」批判と「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャルの実現」の肯定というマキャーネルの議論の大枠に鑑み特徴を挙げるとすれば、マキャーネルにおいては「他人（ツーリズム産業・行政・・・）が作った欲望に身を任せること」と、「自らの欲望と快楽を追求すること」とが対比的に捉えられ、後者が肯定されている、と言えるようである。後者は更に「倫理的」だとも形容される(ES,p44,90)。マキャーネルは「ツーリストの倫理的仕事」は「自分自身の個人的快楽と、＜楽しめ！＞という社会的命令との間の差異を見つけようと努力することにある。倫理的ツーリストは自らの快楽と、それがいかなる善に寄与するかを理解する責任を取ろうとする」と言う。(ES,p53)

以上の議論を継承し更に展開する為には、何が必要であろうか。これについてまず指摘すべきは、

「ツーリストの主観性や欲望」に関する議論は、ニュアンスに富んだ理解が必要となるということである。さもなくば、我々は世界をあまりにも単純化してしまう二項対立の罫に容易にはまることとなってしまふ。(ブーアスティンの名高い「ツーリスト」と「トラベラー」の区別のように。) 言い換えれば、「実体」として「倫理的ツーリスト」と「非倫理的・反倫理的ツーリスト」が存在しているわけではない、とも言えよう。一人の者が或る時は「ツーリズムの円環」の中に微睡み、別の或る時には「欲望のポテンシャルを実現」することもありうるだろう。「円環」の中にいることを自覚的に楽しむあり方(ポスト・ツーリスト)も当然、存在するだろう。また別の観点からは、「自らの欲望や快楽」を忠実に追求するツーリストが必ずしも「善」を体現するわけでもないだろう点、「自らの欲望や快楽」が「自然な成り行きで、努力無しで」、「ツーリストの円環」から外れてしまう者もいるだろう点、逆に「ツーリストの円環」から努力して外れようとする者もいるだろう点などにも、留意すべきである。これらの様々なニュアンスを含む多様な「欲望と快楽、それに基づく行為」のパターンについて、事例を通して考えていく、記述を重ねていく必要があるはずである。

強調しておくべきは、「欲望」と「快楽」について「ツーリストの円環」から出ることを要請するマキヤーネルの立場をどう評価するかは措くとしても、一般的に自らの欲望と快楽の形、それに基づく行為の結果の善悪を考慮することは「倫理的主体」にとって必要である、逆に言えばそのような存在こそが「倫理的主体」であることを思えば、マキヤーネルの「欲望」と「快楽」に関する議論は本質的には至極全うで、見方によっては凡庸な論点を主張しているに過ぎないとも言える点である。故に、精神分析の教える「欲望」や「快楽」に関するラディカルな論点が果たして十全にマキヤーネルの理論に活用され尽くしているかについては、再検討が必要であるようにも予感される。

次に簡単にではあるが、本質的な重要性を持つ「幻想」と「想像力」のマキヤーネルによる理解について触れておきたい。

「観光の倫理は幻想に関する詳細な分析を必要とする」(ES,p53)とマキヤーネルは言う。この「幻想」は、「構築された快楽」と等置され、「我々を自分自身や他者やより大きな善から分離させるべくエンジニアリングされたもの」と定義される(ES,p54)。注意すべきはこの「構築された快楽」は余暇やレジャー、観光領域にのみならず労働や日常生活にも関わり、両者ともが「幻想により住まわれた象徴的構築物」であると理解される点である(ES,p54)。我々は通常無自覚的に、日常生活(労働)においてであれ余暇活動においてであれ、「幻想=構築された快楽」の中に住んでいる。

その上で「想像力」はほぼ「幻想」と等置される形で位置づけられているわけだが、マキヤーネルによれば「構築された快楽」の享受に甘んじること、言い換えれば「理想が投影された想像物」や「想像上の他者」から快楽を引き出すことは倫理的ではないと判断されることとなる。(ES,p190) 逆に言えば「倫理的ツーリスト」は「想像的なものを突き抜けるやり方を見出す必要がある。」(ES,p191)

この「想像的なものを突き抜けること」という「倫理的ツーリスト」に要求される振る舞いについては、マキヤーネルの精神分析理論の「観光の倫理」への応用において、ラカンの「想像界・象徴界・現実界」の区別が完全に明瞭な形で活用されているとは言い難い為、聊か解釈が難しい、或いはマキヤーネルの議論自体が混乱しているようにも思われる。例えばマキヤーネルは「象徴的構築物」として存在する「アトラクション」を前に、それが思い通りに自分の意識を形成することを許さず「別様に振る舞うこと、それに疑問を投げかけること、それを象徴的なものだと見なすこと」は「象徴を通り抜けて見る」ことであり、「リアルを一瞥すること」に繋がると言うが(ES,p90)、他

方で「想像なものを突き抜けることで主体がリアルに近づけるというわけではない。想像的なものの枠組みと予めパッケージ化された印象を破ることができる効果があるのみ」だとも言う(ES,p191)。これでは、何から、どのようにして出ること、何に到達することが価値ある事柄として提言されているのか、今一つ判然としない。この混乱が生じている理由としては、「アトラクション」という「象徴的構築物＝構築された快樂」を軸として「象徴界」と「想像界＝幻想」とが曖昧に連結されてしまっている為、「想像界から出ること」と「象徴界から出ること」との区別や、ひいては「現実界(リアルなもの)」の位置と内実が、不明瞭になってしまっているのだと考えられる。この周辺の議論はマキャーネルの精神分析利用の意義と「観光の倫理」の議論の有効性を考えるにあたり極めて重要だと思われるので、稿を改めて論じたい。

#### 4. 「真正性」と「眼差し」の議論

「真正性」と「眼差し」は、ここ数十年の観光研究の枠組みを形成してきた代表的問題設定であると言えるだろう。マキャーネルは本書の中で、この二つの問題についても更なる議論展開を図っている。以下ではこのマキャーネルの議論をまずは理解し、引き続き立てるべき問題を見通したい。

##### 4. 1 「演出された真正性」の遍在化

マキャーネルは「全てが見られうるものとなりつつある時代」に我々が入りつつあるとの認識を強調して議論している。彼は「どこにでも行けて、何でも見られて、何でも経験できて、何でも知りうる文明とは何を意味するのか？」(ES,p19)という問いや、「全ての生活領域における視覚的障壁の体系的な除去のインパクトはいかなるものか？」(ES,p22)という問いを投げかけ、「ラディカルな可視性が社会生活の中心的原理となりつつある」(ES,p20)とする。

マキャーネルはこの状況を、精神分析用語を用いて「社会のレベルで現れつつあるパラノイア的

構造」とも表現する。正常な人間が「一時的で条件付きの、部分的知識」で満足できるのに対し、パラノイアは「他者の持つ真理」を「否定できない欲望の究極的対象とする」傾向にあり、部分的知識では満足できない。これは全てを見なければ(経験しなければ)気が済まない「ツーリストのメンタルな条件のラディカルな形態」だとマキャーネルにより理解され、社会全体のパラノイア化の方向性とツーリズムとが深く関係していると思われている(ES,p21)。両者の関係性が正確にいかなるものであるかは判然としないが、「誰しものが、地上にあるあらゆる場所であらゆるものを見る権利がある」という原理に基づき作動しているツーリズムが(ES,p20)、「ラディカルな可視性の進展」や「社会全体のパラノイア化」といった現象と深く親和性を持つと思なされる点は理解できる。

また、マキャーネルはこの議論を自らがかつて提出した「演出された真正性」の議論へと接続し、「一般化された社会的形式としてパラノイアを受容することは、ツーリストの枠組みを超えて演出された真正性が広がりつつあることとして現れてきている」(ES,p23)と言う。「演出された真正性」はもはや、ツーリズムの文脈でのみ見出されるのではなく、あらゆる社会領域で見出される現象となったとマキャーネルは理解している。

更にマキャーネルは、フーコーのパノプティコン概念を継承し、「社会は完全なパノプティコン装置として形成されつつある」と言う(ES,p25)。彼によれば「演出された真正性の体制において、我々の家も街も、監獄に似て来ている」(ES,p31)。この「パノプティコン配置」においては、主体は自らが従属の源となり、権力との同調性と生産性が同時に高まる(ES,p29)。

「社会全体のパラノイア化」、「演出された真正性の遍在」、「完璧なパノプティコンの実現」といった形で表現されるこのマキャーネルの時代認識・社会認識については、一方で彼の議論の内部の論理展開を更に精密に理解し吟味する必要がある

ろうが、他の社会理論家や哲学者達の議論とも対照させ、より大きな地図に位置づけておく必要もあろう。以下、幾つかの議論を参照しよう。

フーコーの権力理論、規律訓練型社会に関する理論やそれを象徴するパノプティコンという形象については多くの議論が展開されてきている。その中には、フーコーの議論が現代の状況を完全には捉えきれないとし、その議論を批判・更新しようとするものも散見される。

溯れば既に 1990 年の段階で、ドゥルーズは規律訓練社会から管理（コントロール）社会への移行を示唆していた<sup>iv</sup>。ドゥルーズの議論を継承・発展させつつある哲学者・社会理論家ラッツァラートによれば、フーコーの生権力論は福祉国家と関係づけられるもので、規律訓練技術は第二次世界大戦後のテイラー主義と福祉国家の時代に最高点に達したものである<sup>vii</sup>。彼によれば、今や我々は、物理的に閉じられた特定の施設・空間の中で主体を規律化し権力に同調するよう仕向けることが課題ではなく、離れたところから「生」や「生活」に作用しそれらを「整流」する為にコントロール技術が駆使される時代を迎えつつある。彼はこの、「人間の非身体的側面」や「精神的記憶」を整流する技術の総体を「ヌーポリティクス」と呼び、「脳を整流し、精神的記憶における習慣を構成する」ように権力が作動していると言う。より正確に言えば、ラッツァラートによると人類社会には現在、「規律による身体の整形」・「生権力による生命の管理」・「ヌーポリティクスによる記憶と潜在的力の整流」という三層の権力構造が、各社会の置かれた状況に応じ配分されている。

偶然なことにドゥルーズと同じ年に生まれ今も活躍を続ける社会理論家バウマンもまた、「パノプティコンのイメージは権力と管理の近代化の本質をほぼ完璧に表現した暗喩であるが・・・現実に生じつつある変化の性質を認識する上で、助けというよりも妨げとなっている」<sup>ix</sup>と述べ、フーコーの権力理論に依拠し続けることの限界を指摘する。

彼は「規律を叩き込み、被収監者達の行動に画一的パターンを強制すること」を旨とするパノプティコンを「差異、選択、多様性を攻撃する武器」と表現する。他方で現在増殖しつつある、「信頼可能で信用に値する消費者を記録しそれ以外を排除する」データベースを「選別、分離、排除の道具」とし、「スーパーパノプティコン」と呼ぶ（【バウマン】 p70-71）。クレジットカード使用者が自発的に自らの情報をデータベースに提供するように、「スーパーパノプティコン」の体制においては、主体はもはや権力により何かを強制されるのではなく、自発的に体制の維持・発展に貢献することとなる。その他にもバウマンは、パノプティコンと並行的に発展した（がフーコーは言及しなかった）、マスメディアに代表される「シノプティコン」装置の存在や、社会の規範からの逸脱者を矯正し全うな労働へ復帰させることを目指した代表的な規律訓練装置である監獄が現代の変容を遂げつつある点を指摘し（その最先端の事例である「ペリカン・ベイ」刑務所は、「グローバル化への不適合品と廃棄物を空間的に閉じ込める技術」に化していると言われる）、現代の権力構造の変化に注意を促している（【バウマン】 p72、p153-159）。

これらの諸理論家の言説に照らし合わせると、「ラディカルな可視性の進展」や「完璧なパノプティコンの実現」を強調するマキヤーネルの議論は、やや精彩やニュアンスに欠けるもの、或いは現代の状況全体を大局的には捉えきれないもののようにも思われる。但し我々はマキヤーネルが「ツーリストの経験」や「ツーリストの主観性」についての問いを中心に据え、ツーリストの欲望・快樂の在り方や、社会権力構造の中でいかに善く生きれば良いかといった問題意識を持っている点を忘れてはならない。彼の問題意識を継承し、問いを発展的に更新していくのが望まれることだろう。例えばマキヤーネル自身の議論に即して言えば、何故、どのような契機の交錯や組み合わせ

の中で「社会のパラノイア化」が進展しているのかが問われねばならない。また、何故我々の「家も街も監獄に似て来て」しまっているのか、それを欲望し推進している主体は誰なのか、この動きをどう評価し、どう批判すべきなのか、という問いも必要となるだろう。或いは例示したような別の理論家の議論との関係で、マキャネルの問いを更新していくこともできる。例えば、ラッツァラートの議論を踏まえれば、彼の言う「ヌーポリティクス」と観光との関係はどのようなものとなりうるかが問われうる（観光における「精神的記憶の整流」という問題）。またバウマンの議論を踏まえれば、「ラディカルな可視性の進展」で特徴づけられる社会の一隅では、廃棄され誰にも見られないことのない存在が生み出されているのではないか、可視化と不可視化のプロセスが同時進行しているのではないか、その状況をどう受け止め評価すべきか、といった問いが、当然のように浮上してくるはずである。このような問いを探究する中で、「演出された真正性」の内実と位置の問題も、再検討される必要があるだろう。

#### 4. 2 「眼差し」の議論

「真正性」同様に観光研究において継続的な議論対象となってきた「観光の眼差し」についてもマキャネルは本書の中で更新を試みているので、本稿の最後にこの主題とそれが提起する今後の課題について整理しておきたい。

マキャネルによればアーリがフーコー理論を参照しつつ提起した「第一の眼差し」に対し、彼が（主にラカンとゴッフマン理論に依拠して）提起する「第二の眼差し」が「観光の倫理」にとって決定的に重要なものである(ES,p210)。しかしこの「第二の眼差し」をいかに解釈するか、或いはいかにその含意を汲み尽くすかはなかなか難しい作業課題を孕んでいるように思われる。

「第二の眼差し」については有難いことに、マキャネル自身はかなりその定義を列挙しており、以下のような特徴が挙げられている。即ち、「何か

が隠されていること、全ての写真・見かけ・一瞥から何かが失われていることに自覚的である」、「見る事が信じることではないことを知っている」、「日常から離脱することでは満足しない」、「自らの実存を構築する為の倫理的責任を眼差す主体に向け直し、それを企業・国家・ツーリストの表象に任せることを拒否する」、「第二の眼差しの下では、人間主体は自らが進展中の作業であること、それが完全性・全体性・自己充足性を求めるエゴの要求を満たすことができないことを知っている」、「アトラクションそのものよりもアトラクションが示されるやり方に関心を持つ」、「文化的無意識の中にある開かれやギャップを探求する」、「予期せざるもの、構造に窓を開ける対象や出来事、作動している象徴的なものを一瞥する機会を探求する」、といったものである。

これらの様々な定義を受けて、マキャネルの「観光の倫理」の基本的方向性が、「ツーリストの円環」を批判しそれから脱出すること、「ツーリストの欲望の完全な生産的ポテンシャルに達すること」を目指すことを想起すれば、彼の主張したいことの輪郭のようなものは理解できるだろう。（一つ一つの定義を具体的な観光経験の文脈に置き直して理解の内実を深める必要があるにせよ。）マキャネルの言う意味で倫理的である為には、ツーリストは上記のような「第二の眼差し」を持つ必要があることとなる。この点を了解した上で、マキャネルの議論を踏まえ、事柄として更に詰めねばならない問いと、解釈上、詰めねばならない問いが幾つか浮上する。

事柄としての問いの観点をまとめれば、「第二の眼差し」の存在論的地位の問題、発生条件の問題、インパクトの問題、とでも表現できそうである。

これらの問いは相互に関係しあっているのだが、まず、存在論的地位の問題と発生条件の問題について言えば、要するに問われるべきは、「第二の眼差し」はどのような条件のもとで発生し、いかなるものとしてこの世界の中に定位されるのが更

に明瞭化されねばならない、ということである。マキャーネルは「第二の眼差しを哲学的可能性以外のものとして打ち立てることはなかなか難しい。あらゆる社会的制度は（特にツーリズムと観光を支持する制度は）、主体が第二の眼差しをシャットダウンするよう、唆す」と言う（ES,p205）。これを踏まえれば「第二の眼差し」を持つのは至難の技であるようにも了解される。加えて、「第二の眼差し」を持つツーリストの事例としてはスタンダーの小説の主人公など、「ツーリストの円環」から抜け出ている理念的人物が指示されるのみで、一般的に「第二の眼差し」がいかにかに発生するかについての説明もいかに少ない。いつ、誰が、どのようにして「第二の眼差し」を持つことに到達できるのかという問題については、マキャーネルが挙げる範例的事例を再検討しつつ、整理し内実を詰めていく必要があるだろう。

もう一つ、事柄に即した問いとして「第二の眼差し」がそれを持つに至った主体に与えるインパクトや、それを持つ主体が観光行動等を通して社会や世界に対して与えるインパクトをどう捉えるかという問題を挙げておきたい。この問題は「ツーリストが欲望の完全なポテンシャルに達するとはどういうことか」という問題や、ラカンによる「想像界—象徴界—現実界」のマキャーネルによる聊か混乱した導入の問題とも絡み、稿を改めて詳細に検討する必要があるものである。

単純な疑問として浮上するのは、「第二の眼差し」が、「ツーリストの眼差しにより制度化された経験」やマキャーネル言うところの「ツーリストの円環」内部での経験から逸脱するのを見たり経験したりすることを可能とするものであるとして、そのような経験は多かれ少なかれ、多くのツーリストが生きているものではないか、というものがあろう。言い換えれば、観光地で偶然に予期せざるものや出来事に出会うことは、大仰に「第二の眼差し」を持つ主体などを導入せずとも語りうる事態ではないだろうか。マキャーネルの「ツ

ーリストは常に、第一次的な経験と、ツーリストの眼差しにより制度化されたバージョンの経験との違いに倫理的に自覚的であるべきである」（ES,p209）などの言葉を踏まえれば、このような些細な逸脱や予期せぬものとの出会いに常に留意しておくことを以て、「第二の眼差し」の作動と言っても良いような気がしてくる。

しかし他方マキャーネルは、「アトラクションの前に別様に振る舞うこと、それに疑問を投げかけること、それを象徴的なものだと見なすこと、これは普通ではない勇気を必要とする」（ES,p90）、或いは、「象徴を通り抜けて<見る>ことは、リアルを一瞥することに繋がる。これは極めて高い確率で<恐ろしさ>をもたらす。或いは更に恐ろしいことに現実的な絶頂感をもたらす」（ES,p90）と言う。これらの言葉を踏まえれば、「第二の眼差し」を持つことはツーリストにとって極めて困難なことであるようにも解釈できる。このような地点に達したツーリストが社会や世界に対していかなる影響を及ぼすものなのかという問題も、「観光の倫理」を標榜する議論を展開する以上、忘却するわけにはいかない。

以上から言えるのは、マキャーネルの言説の中で、「第二の眼差し」を持つ経験及びそれが主体や社会に与えるインパクトに関する内実が動揺していることを踏まえつつ、この動揺の理由や一貫した解釈に関する再検討が必要である点である。

次に、事柄としての問いに加え、解釈上、文献学上もなかなか難しい問いがマキャーネルの議論には伏在している。特に本稿ではマキャーネルによるフーコー理論の活用と評価に注目したい。

一つ目は認識論的・存在論的観点からの問題とも言えようが、大きくは、マキャーネルはアーリの「眼差し」の議論を批判する為にアーリが依拠しているフーコー理論を批判するという戦略を採用している。そこにマキャーネルによる精神分析（ラカン理論）利用が関わることで、事態が錯綜している、といった状態であると言える。

マキヤーネルは「ゴッフマンとラカンは自己  
や他者、相互作用を形成する眼差しは象徴界にあ  
る」とするが、フーコーは「眼差しは象徴界を逃  
れるとする」(ES,p19)と言う。その上で彼は「言  
語の外で作動する眼差しは、その言語の為の言語  
を必要とする」(ES,p20)、或いは「フーコーに反  
して、人々はイデオロギーを共有せねば同じもの  
は見ない」(ES,p20)と言い、フーコーが安易に  
「象徴界」を逃れる可能性を提起したと批判して  
いる。マキヤーネルの立論においては「象徴界＝  
言語＝イデオロギー」という等式が立てられた上  
で、人間はそれほど簡単に「象徴界」から逃れる  
ことはできない、とフーコーを批判する形となっ  
ていると言えるだろう。注意したいのは、他方で  
マキヤーネルが、それがどれほど難しく珍しいこ  
とであるにせよ、「象徴的なものの作動の自覚」や  
「象徴界から逃れること」を「観光の倫理の要求  
の基礎」とも考えている点である(ES,p89)。そ  
こに彼は「観光が意識と象徴的なものを革命的な  
ものとするポテンシャル」があると言う(ES,p89)。  
(但しマキヤーネルによれば、フロイトやラカン  
の精神分析理論も、「我々を我々自身から遮断す  
る」象徴秩序をいかに超えるかについて教えては  
くれない[ES,p89].)

以上の問題について、さしあたり本稿では以下  
の3つの作業課題を挙げておこう。1) 概念上、マ  
キヤーネルによる「象徴界＝言語＝イデオロギー」  
の等置の妥当性を再吟味する必要がある。2) フー  
コー自身の言説に遡行し、いかに「知－権力」シ  
ステムが構築されるかを再検討すると同時に、フ  
ーコーの理論体系が精神分析(ラカン)用語では  
どのように表現されることになるか、マキヤーネ  
ルの議論の妥当性を判断する為に再検討する必要  
がある。3) マキヤーネル自身の議論にも聊か混乱  
が見られる「現実界の経験」について精神分析理  
論へ遡行し内実を把握した上で、それを観光の文  
脈へと改めて繋げてみる作業が必要である。これ  
らの作業を進めることで、果たしてマキヤーネル

によるフーコー批判がどれほど妥当なものなのか  
に関する理解も深められるはずである。

フーコー理論の活用と評価については、倫理学  
的観点からの問題も更なる探究に値する。マキヤ  
ーネルによれば、アーリによる「眼差し」は「ア  
トラクションのグローバルシステムを、退屈なエ  
ゴのナルシズム的なニーズに奉仕する為の鏡」  
としてしまうと。彼によるとアーリの「眼差し」  
に従う限り、ツーリストは「深い、無意識レ  
ベルの決定論」から逃れられない(ES,p199)。

そこでマキヤーネルは、アーリが依拠している  
はずのフーコーによる主体観・自由観を批判する  
ことで、ツーリストの自由を確保しようとする。  
マキヤーネルのまとめに従えば、フーコーが提起  
する主体は「様々な多様な言説の分節の結果」で  
あり、「固定した構造的枠組み」の中でも自由であ  
り続ける(ES,p199)。事例としてマキヤーネルは  
ディズニーランドとキューバの訪問客を挙げ、両  
者ともに「制度化された表象の主体」であるが、  
それでもなお「競合する言説の間で領土交渉す  
ることができ、自らの顕著な組み合わせ・並置・対  
立・類似性を生産すること」ができるとし、これ  
がアーリ／フーコーに依拠した場合のツーリスト  
の「主観的自由の土台」であるとする(ES,p199)。

この周辺の議論は大変抽象度が高く理解が難し  
いわけだが、少なくとも確実なのは、ディズニー  
ランドに行く者もキューバに行く者も、お仕着せ  
の経験に満足している限り「自由」であり「倫理  
的」であるとはマキヤーネルは言わないはずだ  
という点である。その上でマキヤーネルは、先の引  
用にあるように、ツーリストが自らの欲望や目的  
地での活動・快楽、他者との関係について様々な  
実験(領土交渉)をすることが可能である点を認  
めており、ここにマキヤーネルが理解するところ  
のアーリ／フーコー的な「主観的自由」があるこ  
ととなると解釈できるだろう。然るにマキヤー  
ネルは、この類の「自由」を「自由」であるとは認  
めず、この自由を生きる主体を「フーコー的な主

体、マキャーネル的な主体」と名指し、「誤って全てのものの源であり中心であると自己認識している主体」、「フーコー的なエゴ模倣的なツーリスト」として批判するという姿勢を採るのである。(ES,p204)。

マキャーネルのこの議論については、議論を展開する語彙や概念の抽象度も手伝い、解釈や評価が難しい。しかし当座のところでは、アーリ／フーコー的な「主観的自由」で何が不足であるのかが明瞭に掴みづらい点、アーリ／フーコー的な主体を「全てのものの源であり中心であると自己認識している主体」と理解することの妥当性が判然としない点、を問題設定への予感をもたらす感触として挙げることができるだろう。少なくともフーコー哲学が「全てのものの源であり中心であると自己認識する主体」を提出したという認識は、哲学的常識とは寧ろ真逆な認識と位置づけられるはずである。

結局のところ「観光の倫理」と自由の問題を考えるならば、マキャーネルの議論において「ツーリストの円環」にはまり込むことと「観光の倫理」を体現することと間のニュアンスが詰められていない点に問題があるのではないだろうか。マキャーネルを継承しつつ、彼の議論を越えて先に進む為には、フーコー理論における「主体の自由」の問題を再検討しつつ、それを観光の文脈に引き付けて「ツーリストの欲望の生産的ポテンシャルの実現」という表現の内実を私達なりに充填していく必要があるだろう。

## 5. 結論に代えて

本稿ではマキャーネルの「観光の倫理」の開拓という試みを私達なりに創造的に継承・発展させるべく、個別の論点やテーマに関して検討を加えてきた。本稿で抽出された作業課題を粛々と探究していくことが次の作業となるだろう。

---

i “The Ethics of Sightseeing”p.11  
(D.MacCannell 著・University of California

---

Press,2011) 以下 ES と表記し、引用部に頁数を記載する。

ii マキャーネルが挙げているのは以下のような問いである。「この奇妙な土地に自分がいることは、ここで私が出会う人々や自然システムに何らかの益があるのか、害があるのか?」、「彼らは私の存在を歓迎しているのか、無関心なのか、敵意を持っているのか?」、「彼らはシニカルに私を操作しようとしているのか?」、「彼らの歓迎が本物であっても、私も彼らも気づかない仕方での存在は彼らに害をもたらしているのか?」(ES,p46)

iii Lovelock&Lovelock(2013): “The ethics of tourism critical and applied perspectives”

(Brent Lovelock and Kirsten M. Lovelock, Routledge,2013) p354 以下 ET と表記し、引用部の後に頁数を記載する。

iv マキャーネルは、フロイトとラカンが「倒錯した快楽の普遍性」を指摘し、この普遍性により倫理・欲望・快楽の関連性が人間の精神と社会生活理解の中心となる、と理解している。(ES,p48)

v 例えばマキャーネルがラカンの『セミネールIV』を参照しつつ述べる、「ラカンは人間の最も基本的欲望はくどこか別の場所にあること>だと言った。これはツーリズムがセックスよりも強力であることを示唆するものと解釈できる」(ES, p 68) というような言辞など、刺激的論点が幾つか散在する。vi 課題として「快楽」と「享楽」の精神分析理論における相違をきちんと「観光の倫理」の言説に適用できるかを再検討することも挙げられる。マキャーネルは我々が今や「享楽の時代」に在るとし、それは「快楽そのものが新たな道徳的命令となった時代」(ES,p51) であるとする。彼によるとポストモダンにおいては「楽しんでいない人」や「楽しんでいるように見えない人」は「何か悪いことをしている」ことを意味すると言う。

(ES,p51) この事態を彼は「全員の生活がビールのCMに似ていなければならない時代」だと表現しているが、ラカンの読解を踏まえ「快楽」と「享楽」の概念のツーリズムの文脈における位置付けを再検討する必要があるように思われる。

vii Gilles Deleuze, “Pourparlers”, Les Éditions de Minuit,1990,p240-247

viii Maurizio Lazzarato, “The Concepts of Life and the Living in the Societies of Control”, in “Deleuze and the Social”, Edinburgh University Press,2006,p171-190

ix 『グローバリゼーション 人間への影響』(ジグムント・バウマン著、澤田眞治・中井愛子訳、法政大学出版局、2010年)、p69。以下【バウマン】と表記し参照先として頁数を明記する。